

## 序文

本書は近代社会における情報技術の役割に関する長年にわたる熟考の成果である。この主題についての私の最初の主要な成果は、「意思の征服」と題した書として1976年に刊行された。計算と通信の環境を振り返ると、その当時はまさに「暗黒の時代」であった。当時、コンピュータは行政機関と大企業のみに見える道具で、インターネットは通信技術開発者の目には薄光に過ぎなかった。今、コンピュータは家庭用品で、地球の向こうの何億という人々が定期的に使っている。まるで奇跡のようなこれら全ての変化と、それに関する無数の論評があっても、技術と社会の変質についての基本的な質問には答のないままである。

「意思の征服」での私の目的は、現代社会におけるコンピュータ活用の包括的で首尾一貫した像を描くことであり、その目的の追求に、情報技術と社会制度の関係を調べ、特に、社会の変化が新技術の利用によりどのように促進されるかという点に興味を持った。

通常、コンピュータと社会に関する研究は、技術または社会の特徴、またはこれら両方の特徴を持って構成される。そのような特徴の典型は、(1)システム機能(例えばセキュリティと完全性、アクセス、分散・集中処理、仮想化など)、(2)コンピュータアプリケーション(例えば決定支援、設計支援、教育・学習支援など)、(3)アプリケーションの場(例えばオフィス、工場、学校、病院、行政機関など)と、(4)社会問題(例えばプライバシー、雇用、職生活の質、組織、国民参加など)である。残念ながら、これらは著者の興味をつるすに都合の良い釘以上のなものでもなく、技術の社会への関係という理論に基づかない。特定の歴史の瞬間という観点でどんなに面白くて有用であったとしても、これらの研究にはわか仕込みに行った観察の目録に過ぎない。

私は、このような理論の欠如が重大な落度となっていることに気づいた。というのも、どの技術革命を解釈にも本質的に同じ分析を再使用していると思われるからである。1960年代にはプライバシーの侵略脅威が激しい政策論争をひき起こしたが、これはメインフレームで動く特に規制のない個人データ記録システムに関してであり、その後プライバシー保護法の制定への1970年代の政治的な動きを刺激したが、技術とプライバシーの結びつきに関する適切な理論を生み出すことができなかった。その結果、今日のワールドワイド・ウェブ上のエレクトリック・コマースの環境で60年代と70年代に提起された問題の全てが再考されている状況である。別の例がコンピュータと雇用の問題である。この問題の分析のため、雇用レベルに負の潜在効果を持つオートメーションの脅威が噴出した1950年代後期から幾度となく同じものが再発明されている。

「意思の征服」に集めた問題群を取り扱うべき妥当な理論が不在であり、この不満が契機となって技術革新と結びついた社会変革のメカニズムについての疑問を持つようになった。私は、生産における工場システムと連携した18世紀後期の政治経済に関するアダム・スミスの分析に深い洞察を得た。この分析は、今日の生産組織と社会組織の間の接続を探すべく思考様式を私に促し、仮想組織がその接続の鍵であることをさとした。

私は1970年代末に仮想組織の概念を生み出したが、これはグローバル企業の運営が、計算機システムの仮想記憶の管理に類似することに基づく。グローバル企業は、経費削減による利益増大のために、生産拠点の移動や供給元を切り替える「組織的」なプログラムに従っているように思われた。このような経営技法の組織的な活用は斬新であって、生産のニーズを、それを満たすべき手段とは独立して識別するという組織的な革新が生み出したものである。ニーズ(すなわち論理的なメモリ)と手段(物理的なメモリ)の明確な分離が仮想記憶管理の基礎で、ちょうど類似するのである。

仮想組織には高度な情報技術が不可欠で、コンピュータがニーズと手段の間を取り持つのに必要となる。追跡や分類や代案作成などに活用され、経営者にはニーズを満たすべく異なった手段の切り替えを許すという柔軟性を与える。コンピュータの機能は、クライアントに斟酌すべき選択肢を与えるブローカーのそれにたとえられよう。仮想組織のすべての要素に、調停と仲介の機能が広がる。

アダム・スミスの時代のごとく、組織化の新しい原理が市場経済を変え、社会制度に新生面を開きつつある。私は仮想組織の概念を、情報技術と結びついた社会変革の理論の基盤としてこの本で扱う。計算と遠距離通信の革新が仮想組織をもたらした。今日、仮想組織の基になる経営原則は様々なビジネス企業で大きな強みとなっているが、特にサイバースペースでのビジネス運営によく合っている。電子コマースが成熟するにつれ、仮想組織

がますます身近となる。

これら原理への固着により獲得される経済利点が、伝統的な経営概念を塗り替えることは必定である。仮想組織が定着すれば、我々の知る生活はまったく変わり、封建制度がその指揮するビジネス、学校の運営、警察、他のかつての公益事業と共に復活する。

この本の目的は、(1)仮想組織の概念を示し、それが何であるか、どのように働くか、そして実際問題として何がその実現に必要であることを説明すること、(2)この新しい組織化パラダイムの広範囲にわたる拡散の成り行きを追跡すること、の二点である。最初の6章は概念とマネージメントとの係わり合いを詳述し、残りの4章は仮想組織のより広範囲な社会との関連を探究する。

本書の第一章では、仮想組織の知覚面を考察し、後続章での議論の焦点を定める。第二章は、仮想組織を記述し、仮想の仕事やメタマネージメントに関する概念を定義する。引き続き三つの章ではこの新しい組織様式の推進役や台脚となるものについて論じる。仮想組織に必須な柔軟性をもたらし、人間の代わりとなるコンピュータベースの情報製品や情報サービスを第三章で調べ、「在来社会(socionomics)」と呼ばれる新しい研究分野を第四章で紹介する。これはスイッチングによる「カット・アンド・ペースト」操作を支援するための高度な社会規範を理論付けるものである。第五章では仮想組織での商業実務に不可欠な洗練された金融手段を分析し、第六章では実務面での仮想組織を概観する。第七章では国家に起きている変革、特に公的および私的機関の間の行動領域の区分けの再定義を考察し、第八章では出現しつつある政治経済を詳述する。第九章では変わりつつある生産と消費の役割に焦点を合わせ、仮想封建制における生活を描き、最終的に第十章で、個人と社会が新しい秩序に順応するための課題を探究する。

私の同僚と仲間の多くが仮想組織とその社会的重要性を考察する際に影響を与えた。特に、ここに詳述できないほど多数の論議と洞察をもたらしてくれた、ヘンク・ファン・ドンジェン(Henk van Dongen)教授に深い恩義を感じる。彼には1979年から1980年を皮切りとしたオランダの諸大学への訪問の都合をつけてもらった。自身の文化から離れて異なった文化の中で生活し、働く経験は、仮想組織のオペレーションやスイッチングの洞察を得るのに不可欠であった。クロード・フォーショー(Calude Faucheux)教授は、スイッチングの活用には組織の自己反映が必要である点、数多くの会話での彼の力説によって、私の本質的な理解を導いた。ジョージオ・インゼイリ(Giorgio Inzerilli)博士は、スイッチングの幾つかの限界、および公式・非公式の組織編制の相対的コストの違いの理解を助けた。エリック・スメイジャー(Eric Esmeijer)氏とパスカル・シーバー(Pascal Sieber)博士は、スイッチングの概念の組織ネットワークへの拡張を促した。本稿最終稿に臨み、洞察力に富んで建設的なコメントを与えてくれたドットィー・マッキシク(Dottie McKissick)博士、マーレー・ターロフ(Murray Turoff)教授、およびエリア・ズレイク(Elia Zureik)教授に感謝する。また、本書の主題に関して以前に書いた論文に批評を与えてくれた、ウィリアム・ベンゼン(William Benzon)博士とジェレミー・シャピロ(Jeremy Shapiro)博士に感謝する。本書での誤りや不備についてはもちろん私自身が全ての責任を持つ。